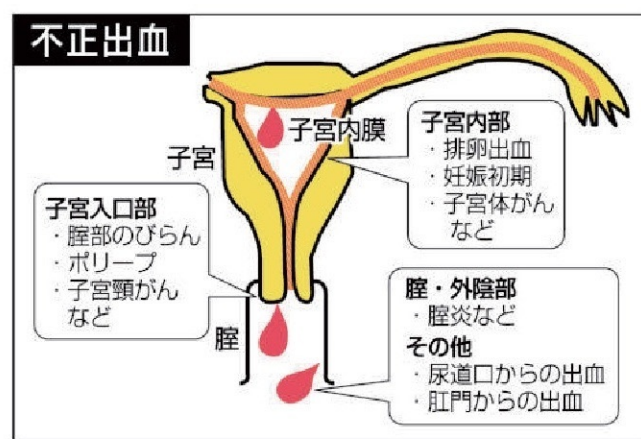




皆さんは、月経以外の時に出血する「不正出血」を経験したことがありますか？女性の7割が一度は経験します。医療機関を受診しようと思う、最も多いきっかけの一つです。トイレでティッシュに薄くにじむ程度から月経のような出血まで量はさまざまですが、出血の量そのものより、出血しないはずの時期に出血することが問題になります。ここでは妊娠が可能な年代の「不正出血」について考えてみましょう。初経前や閉経後の「不正出血」については別の機会に譲ります。

不正出血

ただ少量の出血があったという場合は、再度出血するかどうか様子を見ておかまいません。しかし、数年間検診を受けていない人は、例えおりものにピンク色の血が混じる程度でも、婦人科を受診しましょう。子宮がんは初期の段階ではほとんど症状はありません。不正出血するということがある程度進行している可能性があります。必ず受診してください。



量の出血が起きることがしばしばあります。この出血を月経と勘違いし妊娠に気付かない女性もいるほどです。子宮入口部からの不正出血で最も多い原因が腔(ちつ)部びらんです。ホルモンの影響を受け、内部の粘膜が子宮の入口の

子宮がんの可能性も

子宮体がんです。毎年婦人科検診を受けていて、1回



産婦人科医

今井篤志氏

う。出血する部位を分ける。子宮内部からの出血で最も多いのが排卵出血です。月経と月経のちょうど中間に排卵が起きます。排卵前後でホルモンの環境が変化するため、出血します。病気ではなく、むしろホル

基礎体温つけて見極めを

外まで下りてきている状態です。病気ではなく、妊娠可能な女性の8割に見られます。子宮内の粘膜ですからもうい状態で、出血しやすく、性交や激しい運動で容易に出血します。また、子宮入口のポリープも出血の原因になりますが、良性です。簡単に切除できます。外陰や腔の炎症も比較的に、基礎体温をつけることがとても重要です(2012年8月6日付本欄参照)。排卵の時期やホルモンバランスの良しあしを知ることができるようになります。また年1回検診を受け、子宮がんがないことを確認すると、不正出血があったとしても安心できます。

(松波総合病院腫瘍内分
泌センター長、羽島郡笠松
町田代)